



104号
2005/6/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」

東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://users.hoops.ne.jp/wanli-jp/>

Eメール:wanli@m2.ocv.ne.jp

ホームページは毎月5日頃までに更新を務めています。



働く子ども 撮影：畠博之

ネパール西部山地ゴルカで撮影。小学校2年生くらいの女の子が学校から帰ってから、牛や山羊の飼料として草刈をして夕方家に帰る。

「わんりい」104号の主な目次

中国紹介⑩〈福建省・土楼6〉	2
台湾で日帰り登山(台北辺)	4
「太郎の子ども図書館」作りたい	6
ラオス東北の山村での滞在より	7
松本杏花さんの俳句	8
何媛媛来信⑮「婚姻にまつわる民俗2」	9
中国を読む⑧【日本人と中国人】	9
ピースポート105日間の旅 IV	10
アフリカとの出会い	11
〈ケニア料理講座〉案内	12
サークル祭りスナップ集	13
わんりい掲示板	13

青葉若葉の美しい季節を迎えています。木々の芽吹き
の頃からこの季節の、日本の緑の彩の豊かさに酔酩しま
す。テレビが映し出す、紛争やまぬ国々に日本のこの季節
のこの緑の美しさを贈ることができたら一瞬でも心安らく
時間をも贈ることができでしょう。

四季の移り変わりのある国に生きる幸せを感じさせるこ
の季節です。

♪♪ 笑顔が美しくなる ♪♪

「中国語で歌おう会」 会員募集中！
明るく楽しい中国人歌手・趙鳳英さんと歌いましょう！



6月の講座 6月17日(金)
19:00 ~ 20:45

麻生市民館・視聴覚室(新百合ヶ丘駅下車北口3分)

- 4月の練習曲「妈妈的吻」(お母さんのキス)
 - 5月の練習曲「彩雲追月」(南の国の花嫁さん)
- 上記2曲の復習をします。

指導：趙鳳英さん(中国四川省出身歌手)

体験参加歓迎！ご自由にご参加ください！！
体験参加費：1500円

ご参加される方は録音機をお持ちください。
問合せは、「わんりい」事務局へどうぞ

【中国紹介 《20》】 〈福建省・土楼6〉

轡田 美弥子

土楼についてはここ数年世界遺産に申請中とのことで壁などに中国らしく、スローガンで「世界遺産に登録しよう」といったようなものを見かけるようになりました。永定のどこかには空港ができたようです。洪坑村には駐車場、電動カート、観光土楼見取り図、食堂などがそろってきました。整備が進んでいるのは確かだと思います。この上、都市からの道路が整備されて未舗装などがなくなれば確かに世界遺産的価値はあると思います。ユネスコも登録申請を受理したとのこと、2006年から審査が始まり2008年には永定、南靖、華安地方の有名な土楼はそっくり登録される可能性があるそうです。

しかしそこに住んでいる住人にとってはどうなのでしょう。世界遺産になれば世界中から観光客が訪れ、部屋を見たり写真を撮ったりするでしょう。日本でも個人情報の保護が注目されるようになりました。中国でも遅かれ早かれプライバシーや個人の権利などが全国的に問題になってくるでしょう。集団より個を重視する核家族化が進み、マンションは日本以上に厳重管理されていたりする国です。いずれ土楼は単に観光用の建物となり生活のにおいが感じられない空疎なものになっていくのかもしれない。世界遺産申請から何年か経過していますがまだ登録に至っていないのは、環境管理の問題かもしれません。周囲の匪賊から家族を守る要塞という一面もあったので立地は山奥であり、交通はとても便利とはいえません。しかも現在でも人が住んでいるので、観光のためといえども改装することは難しいでしょう。土楼といっても無数にあるので、観光用に完全開放されている民俗村や、ごく普通の一般住宅、他の村との勢力関係などもあるようです。洪坑村の目の前にありながら民俗村という観光地域に入っていない環興楼はどういうことか、といわれたことがあります。この楼もかなり大きな円楼で、内容からいっても民俗村に入ってもおかしくないと思います。

何はともあれ、土楼を多くの人に知ってもらうのは良いことだと思います。彼らにとっても、観光収入はよい現金収入になるでしょう。楼によっては、観光客に説明する専門の人がいます。ボランティア的なので入場料を払えば、依頼せずともぴったりくっついてきて早口の中国語で説明してくれます。ありがたいといえばそうなのですが、残念ながら全部は理解できません。しかし実態に即しているので内容がわかれば、良いガイドになります。

南靖県梅林郷にある和貴楼は、この専門家がいる有名な

方楼です。風水で場所を選んだようですが、そこは泥地でした。本来建物を建てる場所ではないはずですが、1732年に五層、内部に立派な祖堂をもつ和貴楼が建てられました。全部で140部屋ありますが、2000年時点では簡氏13家族47人が暮らしているそうです。内部には学校もあり、一族からは中央官僚になった人もいるようです。井戸が二つあり、一つは水が甘く飲料水として使われています。もう一つは味が甘くないので洗濯用として使われています。同じ場所(敷地内)なのに味の異なる二つの井戸ということで、陰陽井と呼ばれているそうです。

泥地にありながら、建物は傾いていたりしません。そこを土楼出身者である説明員簡氏が証拠を見せてくれました。祖堂には小さな中庭があります。地面には石を敷いてあるのですが、そこをよく踏んでみると確かにぐにゅぐにゅとした



福建省和貴楼の内部。泥澤地にある方楼の5階建てで1つの階には28の部屋がある。中庭は狭い。

柔らかい感触があります。建物の内部が湿気を帯びているところがあるのは感じていましたが、それが泥地であるからかはわかりません。しかし地面が柔らかいというのは確かに初めてで、危険であるはずの泥地に立派な方楼を建てた簡氏の先祖は思い切ったことをしたのだと思いました。

それにしても、この説明員簡良発氏の発音はとてもきれいなのですが早口でまくし立てるように話すので、わたしにはとても全部聞き取ることにはできません。本当の通訳がいたらなあと残念に思いましたが、親切な人で一緒に写真を撮りたいと言ったらいいですよと応じてくれました。

建物の内部は他の楼よりは風通しがよく感じましたし、あまり破壊されてい

ないような印象を受けました。楼の前面が割と広い広場のような空間になっており、その周囲は畑なので楼が密集していないことが気持ちよく感じさせたのかもしれない。

わたしが訪れた福建省の土楼は、数も限られており多くの形式を見たわけではありません。今まで訪問した土楼はすべて内通廊式で、楼内の階段は楼全体で2つとか3つなどというように共同利用のものばかりでした。しかし場所によっては、現在のマンションのように各戸で階段をもつタイプのもの(単元式土楼)があります。福建省のそれは行ったことがありませんが、広東省北部(つまりは福建省隣接地)でこのタイプの土楼を見る機会がありました。各戸に階段がついているため、上下の移動は簡単です。半円ぐるっと回ってやっと自分の部屋にたどり着くということがありません。

広東省饒平(ニャオピン)の道韻楼は中国最大の八角土楼というだけあって、直系は永定のものよりはるかに長いです。



広東省東北部にある中国最大の八角土楼。単元式と呼ばれ、各戸の中に階段がある。



広東省東部にある紫来楼。これも単元式土楼。二重円で明代と清代に作られた。

八角といってもかなり円に近い八角です。中庭がどーんと広がっていて、そこに単元式の部屋がいくつもあります。これはもう立派なマンションです。文化大革命時に一部破壊されてしまいましたが、多くはそのまま残っているので単元式土楼の内部を見て回ることができました。あれだけ直径が広いと、内通廊式では移動が大変です。各家に階段がついてい

れば、いくら土楼の直径が大きくても関係ありません。他人に迷惑をかけず移動できます。廃屋になっている家の階段から最上階に上がりましたが、内円を眺めるとやはり壮観です。中庭が広いし、平屋の集会所みたいな建物もあります。そこでは説明もしてくれるし、国内向けに作られた紹介ビデオもあります。入口には詰め所のような場所があり、門番であるかのように壮年男性がいつも何人か待機しています。現在ではやはり出稼ぎや、近代的な家に住むために土楼を出る人が多いようで、廃屋になっているところはいくつかありますが、ちょっと門を入っても住人は親切で中を見てもいいよ、お茶を飲んでください、と見知らぬ観光客をもてなしてくれます。ゆっくりできないのが残念ですが家庭の雰囲気や少しのぞけたのは貴重な体験でした。単元

式の場合上下移動は簡単ですが、そのかわりに部屋が狭いような気がします。部屋の一部が階段になっているからかもしれません。各戸の外側の門を入ると、その内側にはまた小さな空間(中庭の中庭?)があり1階は台所兼居間兼倉庫といったつくりが多いようです。内通廊式土楼と違うのは、各家が独立しているから炊事設備のある場所が異なることです。内通廊式では、炊事場はあくまで外(内円には違いありませんが、各家から見る外側)にあります。単元式では、各戸の門の内側にあるので炊事の場面は別の家族からは見えません。独立性が高いということで長屋的性格は薄れ、マンションのようです。このタイプだと、隣人との関係は疎遠になる

かもしれません。

もう1箇所、広東省スワトウの近くの「紫来楼」は同じ単元式土楼でしたが、二重円になっており内側は明代、外側は清代に作られたそうです。これもまた面白いですが、それだけ一族の人数が増えたということでしょうか。外円にもまだ人は住んでいました。しかし時代が異なるという話を聞かなければ造りが違うということには気づかないくらいで、特に建

造物としては違いを感じませんでした。

土楼の住人と話をしたり、部屋を見せてもらったりと交流することでより一層土楼への関心がわいてきました。洪坑村そばの環興楼の人には、土楼外で経営している食堂兼旅社でお世話になりました。夜にはその家族と一緒に車で1時間くらいかかる「下洋」という温泉の出る街へ連れていってもらい、中国式温泉を楽しみました。中国式温泉の入浴方法は、日本のように共同浴場ではなく個室になっています。室内はベッドのある部屋と浴槽のある部屋が別々で、入浴後にゆっくり寝ることもできるようです。温泉の湯にはまったく期待していませんでしたが、浴槽にはってみるととてもきれいでしかも気持ちよく入れました。温度も適度だし、浴槽



福建省環興楼内部。円楼4階建てで直径もかなり大きい住んでいる人は少なくがらんとしていた。内円の低い建物は以前の倉庫。

がとても広い(本来は二人で入るカップル用なんです)のでゆったりできました。入浴後、店の入口ではお茶など出してくれたので久しぶりにのんびりと疲れをとりました。もしこのとき勧められていた承啓楼に泊まっていたら、シャワーはもちろん浴槽つき温泉体験はできませんでした。環興楼の元住人が経営している旅社は3階建てで各階に水洗トイレとシャワーと洗面はついていましたが、さすがに温泉はないので貴重な体験でした。自由旅行の楽しみは、こういった思いがけない出会いや体験にあります。幸い土楼に詳しいタクシーの運転手とも知り合いになり、今後も福建地区の土楼には機会をみつけて訪れたいものです。

▶台湾日帰り登山+観光

台湾で山登りといえば、誰もが最高峰の「玉山」を連想する。玉山へは行ってみたいが、体力の心配があるし、5月の連休でもあり、物見遊山気分で行ける簡単な山を探した。日本ではあまり知られていない、「ご当地有名ハイキングコース」の山が台湾にもあるだろうと考えた。サブザック程度の日帰り登山プラス観光だ。

予備知識がないので、どこでもよかったのだが、「中華民国交通部観光局(日本語版)」のホームページを探し当て、「阿里山」と「陽明山」に決めた。「阿里山」という名前のマッサージュ屋さんが、私の職場近くにあり、字面から、何となく「アリサン」とは韓国の地名と思っていた。

2005年4月30日、台北に着いて2日目、きょうは「陽明山」へ行く日である。「陽明山」とは台北から北東に位置する山塊の総称、最高峰は「七星山(1120m)」。日本でいえば箱根山のような感じの火山で、温泉や、リゾート施設がある点も似ている。山のかなりの部分が「陽明山国家公園」になっていて、台北市民に親しまれている。

日本の旅行会社で手配してくれた現地旅行社のガイドは、邱秋梅さん(客家出身)、日本に留学経験がある女性だ。彼女と朝6:30に台北のホテルロビーで落ち合う。前日飛行場でお目見えしたときの彼女は、世界共通ガイド服ともいべき、黒衣装だったが、今朝は赤いウィンドヤッケとディバッグの登山者スタイルだ。靴も赤で、富士山に登ったときに買ったものだそう(買ったのは台北)。私は富士山には登っていないので、彼女の方が「山歴」が上位だ。

邱さんを先頭に、ホテルを出発。バス停まで繁華街を歩いて抜けていく。早朝なので、各商店やオフィスビルはシャッターが閉まっている。その閉まったシャッターの、ガラとした軒下の歩道で働く人たちがいた。それは新聞売りである。広告を挟んだり部数を揃えたりの仕分けをしていた。このような作業は、日本なら新聞各社ごとの販売店があって、屋内でするのが南国台湾では冬の寒さもないせいか、外でやる仕組みらしい。

各商店、ビルの前の歩道は、連続した屋根のアーケードだ。ただし、アーケードの上はすぐ家屋になっている、つま



陽明山の代表的植物/通泉草、別称六角定茎草、ゴマハグサ科

り歩道の幅だけ1階の建物が後退しているのだ。これは屋間の直射日光、暑さ、風雨を避けるための知恵だ。それぞれが私有地に随時作ったのか形が不揃だし、足もとに段差があったりする。歩道の段差がなければ良い仕組みで、このアーケードのおかげで新聞の仕分けが野外でできるだろう。この連続した商店街の屋根は、主な道のほとんどにあり、我が国で新潟の古い街に残る、雪除けの「雁木」造りによく似ている。

▶バスで陽明山国家公園へ

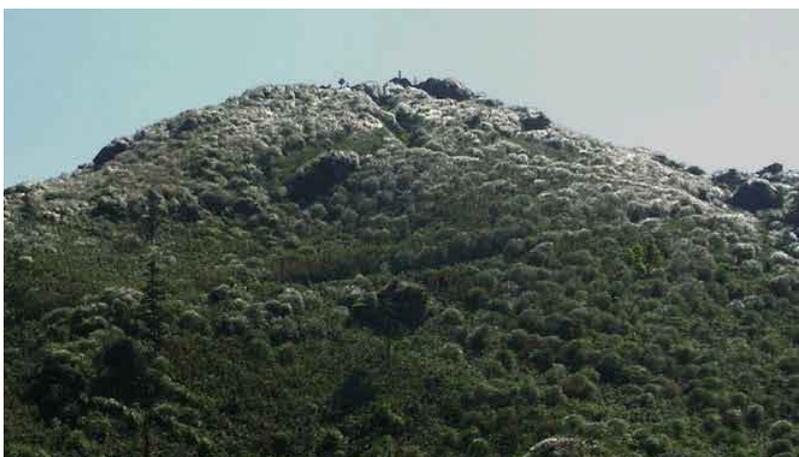
台湾の公共交通機関は、よく整っているし、日本と比べると安い。そのせいか、我々も台北から登山口まで公共のバスで行く手はずとなっていた。一行5人(ガイドも入れて)は都会の横丁といったおもむきのバス停から、「金山」という北海岸の街へ行くバスに乗った。この路線が、きょう登る「七星山」登山口を経由する。一緒に乗りこんだ地元客数人もハイキング姿や行楽支度だった。

バスは意外とデラックスで、日本なら長距離夜行バスに使うような3列シート配置でゆったりとしている。始めは、がら空きだったが、台北市内の停留所に止まるごとに、少しずつ乗客を拾って、最終的には座席は8割方の乗車率になった。台湾はマイカーが日本ほど普及していないせいか、バスの乗車率は日本より高いと思う。一昔前の日本も観光地のバスは繁盛していたのを思い出す。

郊外に出ると多かった車も少なくなって、緑が多くなる。天気もよく、だんだん遠足気分になってきた。やがて市街地を抜け山道になる。傾斜道でもたっぴり2車線をとった幹線道路は進むにつれ、いくつかのヘアピンカーブを重ねて山奥へと導かれた。

▶風に吹かれて台北市最高峰へ

台北から約1時間、目的地のバス停「七星山前」に着いた。「登山口」ではなく「前」と名付けるのが、台湾式なのであろう。下車地のおよその標高は730m、そうすると400mほどの登れば「七星山」なので楽なものだ。降りてみて判ったのだが、かなりの風が吹いている、帽子が飛ばされ



七星山頂上と風ではためくススキ

そうだ。まわりには、背の高い樹木はなく、ススキと灌木、ササで草山という印象である。階段状の道を登るとすぐに見晴らしのよい台地着いた。ここには、車で来る人のための駐車場と売店、トイレがあった。時刻が早かったので売店はまだやっていない。早起きをしたため、食べ損なった朝食をここで摂ることにする。とはいっても、猛烈な風なので弁当屑などが飛ばされないよう、建物の陰に陣取る。弁当は、ホテル内の軽食屋が作ったサンドイッチだ。味はまあまあといったところ。大きめの紙コップに入ったコンソメスープが付いて、中国風だと思った。日本流は遠足用弁当にスープは付けない。台湾でも、日本と同じようにパン食が広まって、米の需要が頭打ちだそう。台北の街角にも、店頭でサンドイッチ制作中のパン屋がかなりの頻度で目に付いた。

食事を終えて、小道を登るとすぐに爆裂火口のへりに出た。「小油坑」という名勝地で、すり鉢状の窪地の中から噴煙が上がっている。日本でも火山地帯なら各所にある爆裂火口だ。登山道から人が落ちないように、しっかりした柵が続く。早くも下山する人もいて、「早！」などと、すれ違うときに挨拶を交わす。我々のご婦人方2人は、ガイドともども、見慣れない花や、見慣れた植物によく似た草に出会うと、そのつど立ち止まり評定するので、なかなか進まない。

やがて急坂の窪地をひと登りで、小尾根に取り付く。風がよけい強くなったが、見晴らしも良くなった。行く手眼下には遠く台北近郊のビル群が林立し、左手北側には山に挟まれた海岸線の一部が望まれた。邱さんの説明では、この山はススキが美しいので名高いそうだ。まだ若い火山なので、森林の形成までいたらないのであろう。山頂が間近になった。頂上を囲むススキの原は、絶え間ない風にさらされて、葉裏が逆立ってはためき、陽光を浴びて輝いていた。豊かな日照のためか、たくましいススキだった。

10:40、七星山到着。山頂は小規模な岩場で、「三角点」と「一等衛星控制点」というプレートを付けた石柱がそれぞれ埋め込んであった。人気のある山なのだろう、幾人ものひとが思い思いの格好で、グループ、家族連れと山頂に上がってくる。日本の山より若い人の割合が多いと感じた。

展望を十分楽しんで、次は「七星山東峰(1107m)」へ向かう。といってもわずか250mほどの距離なので、ちょっと下ってちょっと登ると着いてしまった。ここではあまり休まず、下山道を進む。我々がとったコースは七星山を北西から南東に越える道だった。しばらく急坂を下ると、照葉樹林の中に入った。風があったので暑くはなかったが、日陰になってほっとする。下から登ってくる一行に道を譲ったり、後ろから迫ってくる早足下山者に道を空けたするのは、日本と同じだ。違うのは、危険注意箇所に設ける柵が、木に似せたコンクリートの柵ではなく、竹に似せた、コンクリートの柵なので、お国柄を感じた。

途中の吾妻屋で一休みして、持参の果物(もちろん台湾産)を食べる。「蓮霧(レンブ)」などというザク口の一種のリンゴのような果物をかじると、台湾を感じた。

なおも下山道を行くと、広い舗装道路に出た。道路の向



七星山、山頂マスクは日本の花粉症のなごり

こうに駐車場と、バス停、トイレ、及び「冷水ツーリストステーション」という観光案内所があり、きょうの歩行はここまでとする。ここはバス停でいうと「冷水坑前」という。「冷水坑」というスポットがあったのだが、知らなかったので見逃してしまった。

昼時なので、セルフサービスの軽食を供する食堂で昼食をとる。台北での夕食を期待して、ここでは軽く食べる。カップ麺を食べる者や、私は肉粽(バーツァン)というちまきを食べた。食堂の売店では、案内文付地図(日本語版、正式名は「陽明山国家公園案内図」)や植物案内図(繁体字)なども売っているので買い求めた。

日本語版地図は2万5千分の一、2002年制作で良くできている。山では日本人に会わなかったが、温泉巡りの日本人観光客などが買い求めるのか。この手の地図はあまり売れるとは思わないが、台湾当局の配慮の細やかさを感じたし、この拙文を書くのにずいぶん世話になった。「ゴミを捨てると、最高1万5千元(約5万2500円)の罰金です」などと決まりが書いてあるのもおもしろい。この地図が、日本で事前に入手できたなら、バスの案内や、詳細なコース案内もついているので、たぶんガイド無しでも歩けたと思う(登山口までタクシーで入ればよいので)。ただし紙質は良くない、何回か開いているうちに、折りに穴が開いてしまった。

▶温泉はまぼろしに

ひと休みの後、ガイドの邱さんに「このあとどうしますか」と問われ、まだ昼過ぎなので、温泉行を希望する。路線バスを乗り継いで台北市ご自慢のMRT(台北新交通システム)の新北投駅まで行った。バスを降りると暑い、下界は30℃はあったであろう。この中を邱さんに導かれて、行ったところは、駅前の豪華温泉施設。温泉はここだという。値段はなんと、1000元(約3500円)! 山帰りの汗を流す、もっと素朴な温泉を期待していた我々は、即座に辞退。帰国してから調べると付近にもっと安い、日本式温泉旅館の風呂があり、そこへ行けば満足だったろう。ガイドの考えと、我々の希望がずれたひとこまであった。邱さん自身は、普段はもっと安いところへ行くそうで、そこで良かったのだが。

こうして、台北のハイキングは終わった。

(阿里山に続く)

ラオスの山からだより NO.1 <太郎の子ども図書館を作りたい>

安井清子 ラオス 山の子ども文庫基金

ラオスの山に住む子どもたちは、なかなか本に触れる機会がありません。また、現在、急激に変わりつつある生活の中で、民族がむかしから語り継いできた「おはなし」も失いつつあります。元々、文字を持っていなかった山の民にとっては、「図書館」や「文庫」はなじみのないものですが、これからの子どもたちが、本のおはなしの世界の楽しさを知ること、未知の、より広い世界への扉をあけ、心の世界を広げていくことができる場所。また同時に、自分たちの民族独自のおはなしに改めて出会っていくことで、自分たちのことを見つめていくことができる場所。そんな場所が必要になっていると感じます。そんな場所・「山の子ども文庫」を作りたいと思います。

また、私たち日本人もその活動に関わり、自然とともに生きる人々の生きざまに触れることで、現在、日本では見えなくなっている、たくさんの「大切なこと」を教えてもらうことができるのではないかと、も思っています。

ラオスの山にはさまざまな民族がおり、どの民族の子どもたちも、おはなしが大好きで必要としているのは同じですが、これまでの関わりで、まず、ラオス東北部のシェンクワン県、ノンヘート郡、ゲオバトゥ村に、「太郎の子ども図書館」(仮称)を作ることから活動をはじめます。

太郎さんとは、武内太郎さんのことです。武内太郎さんは、2001年7月に、NHKの番組製作の取材で、ゲオバトゥ村を訪れました。「語りべじいさんのいる村」という、モンの民話語りを大人から子どもへと伝えていくという話でした。私(安井)は通訳と一緒に仕事をしました。武内さんの海外初仕事だったそうです。ボソボソと話すうちに何か面白いことを言っているユーモア。ときばきとした快い仕事ぶり。そして、子どもたちがいつのまにか、子分のようにあとをついていくような優しさ。山の畑から戻る時、武内さんは一人迷子になり、子どもたちに連れて帰ってもらったこともあって、村では「日本人が迷子になったんだよ」と、噂がもちきりになりました。みんな愉快そうに、子どもたちも大人たちも親しみいっぱい話していたものでした。村長には「娘の婿にならないか?」と言われるほど、モンの人たちに好感を持たれていました。とても気持ちのいい方でした。武内さんは、その人柄と仕事ぶりが買われたのでしょう。その後、海外取材が立て続けに入るととても忙しくなったようです。

武内さんは2002年10月に、NHKスペシャル「ユーラシア21世紀の潮流」を取材中に、パキスタンの北部で、車の転落事故に遭い亡くなりました。28歳でした。

私は、ただ2週間の取材の時だけのおつきあいで、その後会っていませんでしたが、ニュースで知り、本当に残念で悲しくてたまりませんでした。ご家族、親しい方々はどんなにか悲しいだろう辛いだろう… と思いました。でも、何も

できないので、せめてもと、自分が撮った取材中の武内さんの写真を全部アルバムにして、私が覚えている限り、すべての取材中の彼の様子を書き添えて、ご両親にお送りしました。しばらくしてから、お母様からお手紙を頂き、お母様、武内桂子さんと手紙のやりとりが始まりました。

武内桂子さんは、長く東北大学で、そして今は宮城教育大学の図書館でお勤めの方です。手紙をやりとりするうちに、桂子さんは、私のホームページを見て、私も、子どもの図書館の仕事に関わっていたことを知られ、「モンの村に図書館を建てることができないか」とお手紙に書いてこられました。

ゲオバトゥ村は、ノンヘート郡の中心から歩いて2時間、車なら30分ほどのモンの村です。私は、ゲオバトゥ村の子どもたちが大好きで、いつか文庫でも作れたらいいな、とずっと思っていました。取材で2週間滞在していた時も、仕事の合間に子どもたちを集めて、絵本を読んだりおえかきをしたり… と文庫まがいのことをやっていたのです。それを見て、太郎さんが「うちのお袋も図書館の仕事はずっとやっているんですよ」と言っていたのを思い出しました。そして、村を去る日に「オレまた、絶対に来ますよ」と言ったその言葉が、耳に残っていました。

武内桂子さんと私は、そのゲオバトゥ村に、絵本を中心とした本(日本からの絵本にはラオス語訳を貼る)＋ラオスの出版物、そしてモンの民話の録音テープ(300話近く録音済みです)などを軸とする、モンのカルチャー・ライブラリー… というか、「おはなしのある遊び小屋」というか、「みんなが集える、おはなしのある場所」というか… なるものを作りたいと思っています。モンに語り継がれているお話も堪能することができ、また、世界のどの子どもたちも大好きな絵本も見ることができ、そして、モンの子供たち、お年寄りたち、お母さんたちお父さんたち、若者たちも、自分たちの文化を誇り、そこから発信していけるような場所。表現して広げていけるような場所… そして、そこに、日本人もつどえて交流が出来る場所… そんな場所ができたらいいと思います。

2004年6月はじめ、私は、取材の時も一緒に同行してくれたモンの役人、ソムトンさんとともに、2年ぶりに村を訪ね、村長をはじめ、村の人々と話をしました。みんな、太郎さんが亡くなったことをとても悲しく残念に思い、そして、お母さまのお気持ちに深く感じ入っていました。もちろん、図書館の話にはとても喜んでくれました。ソムトンさんは、「モン族の衣装や道具を展示したらどうだろう」と言い、村長は「子どもたちに、ケーン(モンの楽器、葬式などには不可欠なのだが、村では今2人しか吹ける人がいない)を教える教室も開けたらいいな」と言い、私は、太郎さんがみんなに

夢を与えはじめているんだ…と感じました。私も、子ども図書館を作るという夢を見はじめています。

現在、当然の流れですが、村の人々は発電機でテレビを見るようになり、村のお年寄りの話に耳を傾ける時間は少なくなり、子どもたちが深く心におはなしを刻むことはなくなりつつあります。その代わりに、現在彼らが得るのは、商売ベースで作られた刺激の強い映像です。このままでは、豊かなモンの民話の世界もなくなってしまう、ただ外の影響を受けるだけになってしまうと、危惧を覚えました。だからこそ、今、自分からページをめくって、世界を広げる楽しみを身につけ、本を通して、自分から新しい経験を得る…そんな姿勢を身につけることが、早急に必要なのではないか？そのためには、やっぱり「おはなし」の楽しさがあふれた「図書館」「文庫」がなくてはいけないと、焦りすら覚えています。

これから、この計画を実行に移すために動いていきます。私は、立ち上げの時期には数ヶ月～半年は、村に常駐したいと思っていますし、その後も定期的に訪ねるつもりですが、

担当できる人を育てなくてはなりません。私は村の子どもたち自身が図書館の楽しさを身につけて育ち、そして自分たちで運営してくれるようになること、に期待しているのですが…もちろん、それが口で言うほど簡単でないことはわかっています。でも、一步一步実現していきたいことです。

(2004年7月 ラオス山の子ども文庫基金通信より)

5月23日(月)より9日(土)まで、ぼるるプラザ町田6Fのオープンギャラリーにて、ラオス山の子ども文庫との共催で、子どもたちが制作したタペストリーや刺繍絵本が展示されました。

展示の刺繍絵本にはストーリー等も掲示されましたので、来場の皆様はひとつひとつにつけられた物語を丁寧にご覧下さり楽しんでいらっしやるようでした。また、各方面のご協力により盛会でした。

尚、刺繍絵本展の関連事業として、6月2日(木)、19:00～8:30、安井清子さんの「ラオスの山の子どもたちとの図書館活動」というお話の会を開きます。

ラオス東北の山村での滞在より～再会そして誕生

鈴木晋作

これまで、ラオスでの図書館活動の報告に紙面を拝借させて頂いているが、今回は今年3月に滞在したラオス東北部の山村の生活や現地調査時のこぼれ話をしたい。

♡チィ婆さんとの再会

昨年9月に訪れた時、お願いした刺繍を作って待っていてくれたチィばあさん(わりい103号に写真掲載)。前より、少し小さくなったチィばあさんは、「わしの自慢のサトウキビじゃ」と言って、裏の畑から黒糖のサトウキビを採って来てくれた。なんだかとてもおいしいなあ、としみじみ再会の時を味わった。



チィばあさんとサトウキビ

刺繍は一針一針チェーンステッチでグルグル描かれていて、チィばあさんの人柄が表れるような物だった。それでも、少しの

謝礼でいいと言う。とても手の込んだ物なので、次の材料費だと言ってちょっと余計に渡そうとすると、「お金は、またできたときでええんよお。先にお金もらったら作らんといかんと思うから、気になって仕様が無い。今は、いらん。」と言う。言葉は分らないが、チィばあさんの語り口調は、それ自体ひとつのお話を聞いているようだ。

♡うれしい誕生

我々が滞在中に、泊まっていたサイガウ爺さんの家に、孫が生まれた。前に亡くなった次男の末っ子になるのでこ



弟誕生

とさらうれしかったのではないだろうか。

生まれたてほやほやの赤ん坊を、5歳の泣き虫の長男にもう抱かせている。こちらからすると、赤ん坊を落っこしてしまわないかと心配してしまうが、モンの村では当たり前のようなのである。こうやって、自分の弟妹の面倒を覚えていくのかと納得した。村では、7、8歳から自分より幼い弟妹を器用に腰の上に抱っこしている姿をよく見かける。

♡子どもと粘土

ゲオバトゥ村と周りの山には豊富な自然材料がある。山の生活に欠かせない木、竹、草、土、石など山のあちこちに散らばっている。それを手に入れるにも、子どもと長老たちの後ろを付いて山を歩いた。それは、彼らが営みの中で、使い方や特性を見つけて、伝えてきた大事な生活の知恵であり、彼らの「お宝」を見るようでわくわくする。

今回の調査の目的として、村の「土」を触り、村では住宅には積極的に使われない「土」の可能性を考えた。住宅の



粘土の動物たちや手も作った



家具づくり 人がいっぱい

床や壁等に使えると、形態的に自由で、施工に当たっては経済的、循環的であり、今回の図書館建設の中で「持続可能な住空間作り」の提案ができる。

壁などの左官に使えるようなネバネバした粘土を探した。初めに、泊まっている家のサイガウ爺さんの案内で、豚の柵の中からバケツ一杯の土を拝借した。それを、爺さんの家の裏で、捏ねるために乾燥させ、砕いて、また水を含ませ、足で練っていた。

例のように、子どもたちが集まってくる。「あの兄ちゃん、うんこで遊んでいる」と言い遠巻きに見ていたが、ぼくが気持ち良さそうにやっていると、タアという男の子が、一掴みの粘土を持って行き、見事な水牛の造形をやって見せた。角の表現にとってもこだわって造っていた。そのうちに他の子も参加して、あっという間に「泥の動物の展覧会」になった。次の日「泥の造形家」のタアに、他に粘土のある場所に連れて行ってもらった。「黄色い粘土、白い粘土、黒い粘土、それと青い粘土もあるよ」。幾人かは、山での農作業の折に、このような場所を見つけ当然のこのように、泥遊びをしているのだった。こちらとしては大きな発見であり、タアとゲオバトゥの土とも親しくなった。老人と子どもは、多くの好奇心を持って我々に村の入り口を開いてくれる。

♡動き始めた動く「図書館」

この2005年3月のゲオバトゥ村訪問は、調査と銘打って、竹と土で遊びの空間を作り、地元の資源探しとして村人に使い切りカメラを渡し、自らの村を撮ってもらった。



竹のドームの前で記念撮影

それらを通し、多くの発見を日本に持ち帰り、村に小さな空間と多くの足掛かりを残して来た。

図書館は、実質的な空間「ハコ」としてまだ存在しない。しかし活動としては、もう歩み始めている。動き始めた図書館は、物を作り発見する、活動的な「動く図書館」でありたい。子ども文庫基金の安井さんも、ゲオバトゥ村の図書館を中心として文字通り動く「移動図書館」の構想を持っている。

2005年の農閑期(10月下旬～11月)に図書館は着工する予定である。この8月初旬に、安井さんが準備、諸手続きの為、先にラオスに行き、その後9月初旬に現地に赴く。「ゲオバトゥという山村に図書館を作ると言うことはどういうことか?」「図書館が、村の中心となりうるには、どういう役割を果たせばいいのだろうか?」「建築はどのようにあればいいのだろうか?」

それらのことを、一方的な援助ではなく村人と考え、一緒に造ることが必要と考えている。これは、ただの建築の問題ではないと思えてくる。図書館は村に根差し、人の集まる場所、情報の集まる場所、発信する場所を目指す。建築のプロセスは、その導入になるだろう。

松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

青嵐少女塑像の指の反り

Hé fēng fú lǜ xiǎo shāo
和风拂绿晓梢

Shào nǚ sù xiàng zhēn yāo ráo
少女塑像真妖娆

qiān qiān zhǐ wēi qiào
纤纤指微翘

季语：南风，即和风，夏。此风是初夏树叶变绿时刮的熏风，一般是在5月前后。

此句把僵硬的塑像写得栩栩如生，确实不易。俳句创造性的要素之一，就是要尽量删减人为痕迹，形成大自然间的对话。虽然塑像是人造景物，但此处却成了活生生的主体，那迎着和煦南风微微翘曲的纤纤手指，使人联想到婷婷玉立的少女之天真烂漫，并无雕。

前回では、中国の2000年前の周代に定められた結婚の礼儀作法を紹介しました。それでは2000年あまりの歳月を経た近代の様子はどうなっているのでしょうか？

「無媒不成婚」(仲人がいなければ、婚姻は成り立てない)というように、縁談は、普通、男性側の親が仲人を通して女性側の家に婚姻の意志を伝えます。

中国の民間では、姻戚関係にある家族を「親家」と言いますので、婚姻の意思を相手側へ伝える事を「提親」と言い、六礼の「納采」に当たります。

「提親」を女性側が受けると、男性側は占い師のところへ行き、男性と女性の生年月日を占って二人の性質が合うかどうかを占います。失敗を避けるため、前もって女性側の状況をこっそり調べてから不利の要素がなければ、初めて縁談話を始めることも少なくありません。それは六礼の「聞吉」と言えましょう。

近代以後、迷信を信ずる人々は段々少なくなって来ましたが、婚姻は生涯に関わる大事ですので慎重に考える人はまだ大勢います。「馬は牛を怖がる」、「ウサギと竜の取り合わせは涙を流す」、「イノシシと犬は最後をまっとう出来ない」とかは、性質の合わない干支にまつわる諺です。

中国は昔、「父母之命、媒妁之言」(親の命じる事、媒酌人の言う事)といわれ、結婚する男女が自分の意思を言

い出すことは、不孝だと思われていましたから、結婚に関する全てのことは、親と媒酌人の言うとおりにしなければなりません。また「男女授受不親」(男女は物のやり取りはしない)という言われによって、男女は一般的に自由に付き会うことはできませんでしたので、結婚の日の夜になって初めて対面するケースも珍しくありませんでした。

社会の進歩につれて、今では自由恋愛による婚姻が多くなりましたが、見合い結婚も少なくはないのが現状です。その場合でも、二人は、仲人に連れられて会いに行き、互いの容顔や、振る舞い、性格などを初めから了解できるようになっています。それは「相親」と言われ、古い六礼にはない、現代的な縁談の重要な要素です。

「提親」、「相親」が順調に進めば、「訂親」の儀を行います。男性側が金品をもって女性側へ送り、その後、親戚や友達を宴席に招待し、「訂親」の喜びを披露します。

何媛媛：本名、何向真。

山西省出身。山西大学で日本語及び日本文学を専攻し、卒業。一昨年来日して以来、地域の国際交流活動に力を入れ、古箏と中国語を教えています。町田市能ヶ谷町在住。

☎ 042-735-3984

Email:kakoushinjp@yahoo.co.jp

Website:http://www.cn-jp.com

中国を読む ⑳

「日本人と中国人」 陳舜臣 著

集英社文庫



刊行は34年前。しかし、いまだに文庫で読まれている。そのはずである。日本人と中国人の違いをこれだけすっきりと、腑に落としてくれる本はなかなかない。著者の陳氏は神戸生まれの神戸育ちな中国人。子供時代は日本の教科書で『ハナ、ハト、マメ』を習い、祖父からは『三字経』の素読を受けた。気がつけば、日常生活で触れる

ものを、「日本のもの」か「中国のもの」かに分けて認識する大人に。そんな二重生活をしている著者しか書けない日中比較論。

中国と日本は同じ漢字を使う。同じ文字を使っていると、近いという錯覚を起こしやすい。しかし同じ文字を使えど、日中で意味が異なることだってある。たとえば「鬼」。戦時中に日本兵は「東洋鬼」と呼ばれていた。「鬼

畜米兵」とかぶるが、しかし意味は違う。中国で「鬼」とは幽霊のことであって、ひいては不吉なもの、消えてしまうような印象らしい。だから「東洋鬼」は明らかに蔑称。怖いものではなかった。

言葉が世界を切り取る道具である限り、キャラクターにも影響してくる。もともと漢字は中国の発明品で、日本はそれを輸入した。日本に伝えられた数多の書物は、中国人が口角に泡を飛ばして、議論しあい、血と涙と汗の結晶として出来上がった。書物とは記録である。記録とはすなわち歴史。ここに中国人の歴史主義が生まれる。

さて「歴史」と聞いて思い出されるのは、日中間に轟々と流れる歴史認識の問題。思想を輸入した日本。岐路に立たされたときは、外国の書物を参考にすればよかった。司馬遷のように命をかけて記録する者もいなかった。歴史への執着が中国ほど強くない。だから中国人の歴史への重い気持ちが理解しづらい。陳氏は言っている。「相手はわからない。—という白紙の状態から出発したい」と。わからないからこそ、理解する努力をしなければならぬ、ということだろう。

(真中智子)

エリトリアという国の名前は聞いたことがあると思っていたが実は錯覚していたのだ。「どこ？」と訊ねられれば「ほら、あの、バルト海沿岸の…」と答えてしまう。恥ずかしいことにエストニアやリトアニアとごちゃごちゃになっていたのだ。旅行ガイドブックにも載っていないし、地図上では北アフリカのエチオピアの隣の紅海に面した国ということだけ知って乗船した。

エリトリアのマッサワ寄港前、2～3日の俄仕込みの知識によると、独立してまだ12年しか経っていないアフリカで一番若い国である。30年に及ぶエチオピアとの独立戦争後、イサイヤス大統領は「エイズ(援助)はエイズ(AIDS)だ」と、援助漬けになって骨抜きにされて自立できない多くのアフリカ諸国のようになることの怖さを強調。基本政策の一つに「他国に依存しない持続可能な発展」を掲げ、諸外国からの単純な「援助」を遠ざけている。

エリトリア通貨のナクファ(NKF)は独立運動が最初に始まった北部の町の名前に由来する。通常どこの国の紙幣もその国の著名人や建造物が載っているが、ナクファは働く農民や子どもが載っている。目の不自由な人でも指で識別できるようになっている。しかし、1997年にエチオピアの通貨ブルを廃止し、ナクファが発行されたことも一因して、エチオピアとの国境付近では翌年紛争が勃発し、現在も緊張状態が続いている。

この程度の俄か勉強で上陸したエリトリアだった。朝6時マッサワ港着岸、午後1時に出港(帰船リミット正午)という僅か6時間の滞在だ。日中、日差しがあると35°C以上になるという。船の着岸地点から港のゲートまで歩いて15分ほどだが道路はでこぼこ。マッサワ港は貨物船の港だから荷を積んだトラックがひっきりなしに土ぼこりを上げて通り過ぎる。あちこち工事中でクレーン車が作業中だ。苦勞してゲートを出ると民族衣装や布のバッグなどのみやげ物の露店が数軒、店を出している。彼らはピースボートの乗船客のために首都アスマラから何時間もかけてやって来るのだそうだ。オプションツアーのラクダキャラバンのラクダも口コミで100頭ほど数日掛けて遠方から集まってくるという。

郵便局で葉書を出し、20分ほど歩いてハイレセラシェ皇帝の別荘跡に着いた。彼が冬の別荘として建てたトルコ風の豪邸だったが内戦中に砲撃を受けドーム状の屋根は砲弾で穴ぼこだらけ、壁も落ち鉄骨がむき出しになり無残な姿をさらしている。“独立のための戦

い”を忘れないようにと修復せずにそのままの状態が残してあるという。その建物の前の広場にはコンテナがいくつも積み重ねて放置されている。その中には紛争で亡くなったエチオピアの兵士の遺体があるままになって入っているとか…。

そこから海岸沿いに15分ほど歩くと、独立戦争のとき最激戦地となったマッサワで大活躍した3台の戦車が飾られている殉教者記念公園に着く。砲弾の代わりに今は砲身から噴水が飛び出すようになっているそうだが、年間雨量20mmのマッサワでは常時水がているわけではないようだ。公園の近くから新市街へは橋が架けられて道路と鉄道線路が並行して走っている。独立戦争前まではマッサワからアスマラまで蒸気機関車が走り、紅海沿岸から首都へ物資を運ぶ重要な輸送機関だった。戦争でその運行は中止。線路は腐食し折れ曲がり荒れ果てた状態になっていた。復旧作業がこの10年で進められてきたがまだ時間が掛かりそうだという。

ところがピースボートがここへ寄港する際にはわざわざ一部区間、列車を走らせてくれるとのこと。残念ながら私は機関車乗車体験のオプションツアーには参加しなかったので、工事中の線路を歩いて新市街へ入った。朝は曇っていてそれ程暑さを感じなかったが、その頃には太陽が真上からジリジリ照りつけ汗がふき出てきた。塩田を見渡せるところまでいったがフェンスがあってそこでストップ。引き返してカフェのようなレストランのような店でコーヒーを飲んだ。とても甘い本格格的なデミタスコーヒーだった。ピースボートのレストランのコーヒーにやや嫌気がさしていたのでとても美味しく感じられた。

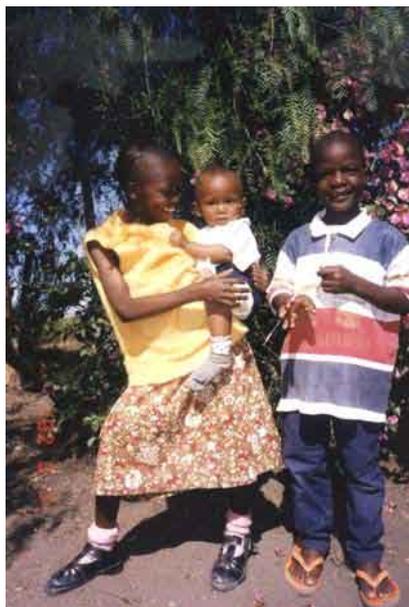
市内では道路の一部を通行止めにして自転車レースが行われていた。日曜日だからだろうか。帰り道は暑さに耐えられずタクシーを使い港のゲートまで戻った。近くの市場でマッサワ名産の自然塩を買って帰船リミット10分前に船に戻った。まずはバーに直行。生ビールで喉を潤した。マッサワの街中ではアルコール飲料を出す店はなかった。この国の半分くらいがイスラム教だからかも…。たった6時間のエリトリア滞在で盛り過ぎの過密スケジュールだった。高い理想を掲げる“アフリカの期待の星”と思われているエリトリアだが、独立後10年を経て、道路や鉄道などのインフラ復旧がいまだ進まず課題を沢山抱えている。そんなエリトリアを駆け足で見られたことに大満足。

(2005年3月6日)

2002年1月、憧れ続けたアフリカに生まれて初めて降り立った。その感動を今も忘れることが出来ない。突き刺すような太陽の光と、暖かい風。遠くから聞こえるアフリカの音楽。人々の笑い声。スーツケース1つの小さな私は、大きなアフリカに「ようこそ」といわれたような気がしていた。迎えの人の声でようやく現実に戻った。

今、アフリカを知って4年。私にとって遠かったアフリカは、ご近所さんになった。そんなアフリカでの体験を少しお話できたらと思う。

「どうしてアフリカに興味があるのですか」と聞かれることがある。人が好き、文化が好き、動物が好き、いろいろあるがどれも違っている気がする。好きだけでは留まらない魅力があるように思う。だから、私は「アフリカには問題がたくさんあるから」と答えるようにしている。マスコミが言う様に、戦争、貧困、エイズ、難民と問題が山積だ。学生の頃から、アフリカの問題とくに経済問題を解決するエコノミストになりたいと思っていた。そのためにイギリスへ発展途上国の問題を勉強しに留学もした。貧困



働いていた孤児院の子どもたち

問題がなくなる限り、人々は不幸のままだと考えたからだ。当時の私は、アフリカ人は全員貧困で、または難民かエイズで、幸せな人は少ないのではないかと考えていた。

金融の世界で働きながら、JICAでアルバイトをしたり、NGOでボランティアをしながらアフリカでエコノミストとして働く日を夢

に見ていた。転機は社会人になってから2年後にやってきた。ボランティアをしていたNGOのケニアの孤児院で3ヵ月ボランティアをするという話だ。将来はアフリカでエコノミストになる足がかりになればと、期待しながら。

★「アフリカの子供たち」

スワヒリ語と英語のほかにそれぞれの部族語を話す。その笑顔はひまわりが夏空の下、パッと咲いたような素敵な笑顔だ。いつもニコニコしている。しかし、その生い立ちや現状を知るにつれて、私はその笑顔がにせものではないかと考えるようになった。家族に育てられることなく、ほかの子供や寮母さんや私のような外国人に囲まれて大きくなる子供たち。そういう子供たちの数は、ケニア国内だけでも相当数だ。もちろん日本にも、世界中のどこでもいるだろう。ただ、アフリカではその原因が貧困やエイズ、戦争であることが多い。そして小さい頃から子供は、よく働く。自分のことは自分です。誰もしてくれないからだ。してくれるものとは最初から思っていない。料理も洗濯も学校の用意も、みんな一人でやる。小学生も高学年になると、自分より小さな子の面倒をみている。子供が子供の世話をしている光景を私は何度も目にした。

「強いなあ」ケニアの子供に対する私の印象だ。「かわいい」という印象はあまりない。ちょうど、サバンナに生きる野生動物のイメージだ。

ボランティアの私の仕事は、NGOが実施している地域貧困層に対する社会サービスの実施を手伝うことだ。午前中は、低料金で実施している保育園の子供たちの勉強を見たり、遊んだり。午後は、縫製教室の生徒と話したり。土曜日には、地域小学生への補習授業と給食サービスの実施。英語や数学をつたないスワヒリ語で教える。エイズセミナーを実施することもあった。会計を担当させてもらったりもした。しかし、私がそこで3ヵ月の間できたことはすごく小さいことだ。迷惑をかけていたことの方が多かったかもしれない。「エコノミストになって、アフリカの人の役に立ちたい」と思っていた私は自分の進むべき道が



ケニアの国会議事堂



孤児院の子供たちとの往復6時間のハイキング

分からなくなっていた。このアフリカには問題がありすぎて、解決することはできないのではないかと。しかし、それ以上にアフリカの人たちは毎日幸せそうで自分なんて用はないのではないかと。

☆「不幸な人」

私は、ケニアで自分は不幸だと嘆く人を見たことがない。もちろん、毎日彼らの日々降りかかる問題を聞いていてもだ。仕事が見つからない。エイズかもしれない。子供を学校にやれない。病院に行くお金がない。食べるものが買えない。家が火事で寝るところがない。貧困からくる問題だらけだ。聞いているほうもつらくなる。お金さえあれば。お金を稼ぐ手段があれば、と思う。

よくアフリカの人のはのんびり屋が多く働かないから、経済が発展しないと言われることがある。しかし、歴史を少し考えてみると、アフリカの多くは植民地を経験している。政治的には独立したけれども、経済的にはまだまだ植民地主義を残しているのが実情だ。ケニアも独立して50年と経たない。経済発展はまだ途上だ。そしてゼロからのスタートではない。マイナスからのスタートなのだ。私は、そんな国情をみているとケニアの人はよくやっている、そんな中でも頑張ろうとしている姿勢に胸を打たれる。また、ケニアには自殺する人がいないと聞いた。

彼らの表情には、明日を信じるアフリカのパワーを感じる。子供の笑顔にもせものではないと今では思う。日々を感謝して、生きていることを楽しんでいる時の表情なのだ。

NGOを去ってからも、2年あまりケニアで過ごした。今では、エコノミストとなってアフリカで活躍しようとは考えていない。それよりはケニアで雇用を生み出せるような、貧困層の人々が収入を得ることができるような活動をしたと思っている。



キクヨ族のお母さんと子どもたち

縁あってケニア人の夫と出会い、共に帰国することになった。3年前、2人で「アフリカン・コネクション」というもっとアフリカを知ってもらおうという趣旨の団体を作った。スワヒリ語教室の運営や紅茶のフェアトレード活動、ケニア料理を味わってもらおうとさまざまな国際交流フェスティバルへの出店、小・中学校の異文化交流の授業への参加等の活動をしている。私たちが広げる小さな輪が、少しずつ広がることで、アフリカに対する偏見や無知を超えて相互理解への足がかりになればと願いつつ。そして、ケニア人の夫はいつも言う。

「貧困は苦しみだ。しかし、不幸ではない」と。

スワヒリ語教室

場 所：橋本公民館 (JR橋本駅徒歩5分サティ内)

時 間：19:30～20:30 曜日：要確認

連絡先：たけだ えつこ

etsuko9@jcom.home.ne.jp

携帯電話：090-6479-3441

料理講習会

ご参加を！ 知っているようで知らないアフリカに親しんでみませんか！

アフリカ料理は美味しい！

●アフリカ・ケニアの健康料理

2005年6月19日(日) 11:00～14:00

於：麻生市民館・料理室 (小田急線新百合ヶ丘下車北口徒歩3分)

参加会費：2500円 (会員：2300円)

講 師：ガスパレイ ミグウィ キルース (ケニア出身)

問合せ&申込：わんりい事務局 Tel 042-734-5100

E-Mail：wanli@m2.ocv.ne.jp

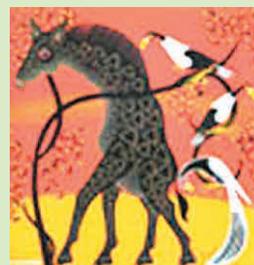
定員 30名：準備の都合上、6月15日までにお申込みください。
但し、定員になり次第締め切ります。

当日の持ち物：エプロン、筆記用具、タオル、プラスチック容器

【予定メニュー】

ケニア風牛肉と野菜のシチュウ、ケニア風チャパティ、カチュンバリ(野菜のサラダ)
サモサ 等

象、キリン、ライオン、シマウマなどなど
さまざまな野生動物の宝庫で知られ、
人類発祥の地でもあるロマンの国・ケニア!
料理を通してケニアに
触れよう!!



＜サークル祭り・スナップ集＞



▲「中国語で歌おう会」公開講座
「いつでも夢を」 趙鳳英さん



▲大ホールで万馬東京馬頭琴教室メンバーの馬頭琴大合奏 ブルグッドさん、ジムルトさんも出場



▲中国琴の演奏と語り 何向真さん



▲馬頭琴体験 ばくだって弾けるよ



▲演奏前の練習 野馬のメンバー、ジムルトさんも出演。万馬東京馬頭琴教室の皆さん



▲馬頭琴演奏で「スーホの白い馬」を語る 桑原紀子さん



▲馬頭琴の不思議な指使い



▲お姉さんに馬頭琴の弾き方を教えてもらった



2005年5月21日(土)、22日(日)麻生市民館で恒例の＜麻生市民館サークル祭りが開かれました。
‘わりい’は視聴覚室を中心にいろいろな催しがあり、充実した2日間でした

◀東京万馬馬頭琴教室に皆さんと桑原紀子さんの「スーホの白い馬」に聴き入る皆さん。

《‘わりい’掲示板》

新潮劇院第17回公演

★京劇★ ～レクチャー付き～

- 三岔口(三差路) ● 小上墳(お墓参り)
- 孫悟空～竜宮で大暴れ

2005年6月4日(土) 19:00開演(18:30開場)
会 場：烏山区民センターホール
前売り：4500円 当日：5000円 全席指定席
主 催：新潮劇院/後 援：中国大使館文化部
申込&問合せ：新潮劇院 TEL/FAX03-3484-6248
E-mail:nobu@shincyo.com

詩と音楽 ～名手たちの演奏と朗読による音空間～

第一回「モンゴル～草原を渡る風」

出演：チ・ボラグ&チ・ブルグッド(馬頭琴)
オドバル(オルティンドー/朗読)他

6月11日(土) 15:00～
神奈川県民ホール 小ホール
3,500円(当日3500円)全席指定

問合せ&申込み：

県民ホールチケットセンター：045-662-8866
音楽堂チケットセンター：045-263-2255

